つながる

小中一貫教育だより
学校教育課・教育センター版
令和８年10月19日　　№56
（小中一貫教育推進だよりから 通算№126）
十日町市教育委員会学校教育課







左：中里子育てフォーラム　　右：第3回幼保小連携研修

写真の説明は 11 ページ

巻頭言『「想像力」とか「準備力」とは言ってはみるものの・・・』

教育文化部長　小林　良久

今年度も上半期が終わろうとする中、ご挨拶が遅れましたが、４月より現職を拝命いたしました小林良久と申します。教育委員会事務局への初めての配属となります。どうかよろしくお願いします。

さて、私は挨拶などの機会をいただくと、いろいろな言葉に「力」（りょく）を付けてお話することがあります。特に「想像力」と「準備力」の二つを好んで使ってきました。

これには自分自身が極度の心配性ということも起因しています。極力慌てることなく、不安を少しでも軽減できるよう、考え得る限りのことに思いを巡らせ、気になることは事前にその芽は摘んでおこうと、自分に言い聞かせた心構えでもあります。格好つけた言い方となりましたが、お許しください。しかし、こんなことばかり続けていては、正直、疲れてしまいますよね。

私たちは今、様々な事象に直面しています。人口減少、少子高齢化、エネルギー問題、円高、物価高騰、あらゆる分野での担い手不足、AI の急速な進化、自然災害、異常気象、野生鳥獣による被害等々、思いつくまま列挙しましたが、多岐にわたる出来事が目まぐるしい勢いで身の回りに起きています。

ひとたびこうしたことが起こると、その都度、これまでに経験したことのない対応や、新たな仕組づくりなどが求められ、社会全体の疲弊感や緊張感が膨らむ一方のように感じています。

加えて、これ以外にも日常生活や地域、職場においても価値観の多様化に伴い、大なり小なりの変化に向き合わなければならない場面が増えているのではないでしょうか。

何が正解か判断しづらい状況では、「想像力」と「準備力」にも限界があります。また、過度に先回りし過ぎて、出ないお化けを怖がってばかりでも精神衛生上よろしくありません。

今の時世を踏まえた働き方を念頭に、緩く生きる自分もオッケーと、折り合いをつけながら、少しでも心穏やかに過ごせればいいという程度のところで、「想像力」と「準備力」を働かせる方が、余程健全なのかもしれませんね。今更ながら、頭の固い自分にそう語り掛けています。

小中一貫教育

■ 中里中学校区の授業研修に学ぶ

７月６日（月）、中里中学校で小中一貫教育研究授業が行われました。中里中学校は、今年度市教育センターから「探究的な学びモデル校」指定を受け、探究的な学びを先進的に実践する学校として実践と検証を進めています。探究学習の基礎的な力、課題解決のプロセス（課題設定→情報収集→整理分析→まとめ表現）、情報活用能力の育成を図るとともに、市全体への参考となる実践をしています。また、田沢小学校と中里中学校は、文部科学省から「調整授業時数制度」を先取りして試行する「サキドリ研究校」指定を受けて探究的な学びを推進する体制を整えています。両校の小中一貫教育研究授業には、そのような意味もあり、教職員にはベクトルをそろえて学び合う姿勢が見られました。

研修会には中里中学校と田沢小学校の先生方 24 人が参加しました。初めに「教育課程柔軟化サキドリ研究校授業」と「小中一貫教育研究授業」から「探究的な学び」に至る手立てについて検討を行うため２つの参観の視点が示されました。

①本時の授業の手立ての中で「探究的な学び」につながり、参考になるものは何か

②本時の授業の手立ての中で「探究的な学び」を行うために別な手立てはないか。

中里中学校の学校だより７月号の中で、八重沢校長は次のように述べています。

「学びたい、知りたい、分かりたい」という学ぶ意欲を高めるとともに、学習の基盤となる力を教科の学習と並行して育むことが、学力の定着に繋がります。そのために注目したことが「探究的

＜学習の基盤となる力＞
①課題を発見する力と学ぶ意欲
②根拠をもとにして考える力
③比較・分類して、整理する力
④情報を読み取り、整理する力
⑤多面的・多角的に考える力
⑥表現し、伝え合う力

な学び」です。自分あるいは自分たちの興味関心のある課題から学びをスタートし、試行錯誤しながら課題解決を図る探究的な学びを実践することで、学ぶ意欲や基盤となる力が高まると考えています。今年度は「探究基礎」と題して、１年生 20 時間、２・３年生 15 時間の授業を行う予定ですが、１学期は、市教育センター指導主事から５～８時間の探究基礎の授業をしてもらいました。「探究基礎の概要説明や情報の整理」「シンキングスキル（比較や分類など）やアクションスキルを学ぼう」「プレゼンしよう」などをテーマとした学習を行いました。生徒は生き生きとした表情で学習し、活気ある話合いやじっくりと考える姿、真剣にプレゼンする姿が、各学年に広がっています。

**　こうした姿が見られる要因は、春から皆さんが目指している居心地のよい学級にあります。誰もが学級において安全に安心して生活できること、学び合い高め合う「よし一緒に頑張ろう！」という友人関係ができていることなどが、探究的な学びの成果に結びつく鍵です。**

　研究授業では、荻原博史先生が１年生社会科の地理分野「世界のさまざまな地域、人々の生活環境」単元の授業を公開しました。公開授業は、単元の２時間目にあたり、気候帯のパズルから気候帯の種類とそれぞれの特色や分類について班で意見交換しながら考察し、次回以降の学習への見通しをもつことをねらいとしています。



　荻原先生は、雨温図（年間の気温と降水量のグラフ）の読み取り方を復習した後、世界には様々な気候があることをパズルを使って考えさせました。まず、班ごとに封筒①（寒帯、温帯、熱帯、冷帯、乾燥帯の５つ気候帯の特徴が分かる資料）が配られました。気候帯の名称とそれぞれの気温、降水量、植生の組み合わせについて、資料を用いて班で予想し合います。班内で個々の予想の違いが明確になり、対話を行って班としての予想を立てます。生徒の実態から言語能力の育成も図りながら、生徒同士が意欲的に意見交換を行う工夫をしていました。

　次に封筒②（西岸海洋性気候、サバナ気候、ステップ気候、地中海性気候、ツンドラ気候など気候の特徴が分かる資料）が配られました。資料には雨温図のほかに北極キツネ、オリーブ、草丈の短い草原などの写真や人々の暮らしが分かる短い文などがあります。生徒はグループで「これは〇〇だから、▲▲気候になるんじゃないか。」と根拠を示しながら話したり、「この写真はテレビの番組で見たことがあるから□□気候の特徴だ。」と自身の知識から得た情報をヒントとして考えたりしていました。お互いの知識を出し合って、情報を精査しながらパズルを組み合わせていました。どの生徒も



参加意欲が旺盛で、グループ内で資料をあちこち動かしながら、意見交換をしていました。

授業後の協議会では、先生方が４～５人編成の５つのグループで授業検討を行いました。ファシリテーショングラフィック（ポストイットを用いて参会者同士の意見をまとめる協議手法）で検討を行い、学習の基盤となる力を教科の学習で培うことが探究的な学びにとって必要であることや探究的な学びに近づけるためにどのような手立てが有効に働いたのかや今後の方向性などが話し合われました。



小中一貫教育の合同授業研究で目指す子どもの姿を一致させて協議をする先生方の取組に敬意を表し、これからの中学校区での合同授業研究にとっても参考になる事例だったと感じました。

■　小中一貫教育取組評価項目の見直しについて

11 月～12 月にかけて小中一貫教育取組評価を行います。今年度は市の第３次総合計画が策定され学校教育の重点が改訂されました。それに伴い小中一貫教育基本計画や令和８年度小中一貫教育実施計画の部分改訂も行いました。教育委員会では、取組評価のあり方も見直しを行うべく協議を重ねてきました。各校には９月 15 日付でアンケート項目をお届けしました。

１　ねらい

学校教育の重点及び小中一貫教育のねらいに則した取組の状況や成果などを、アンケート（児童生徒の意識、教職員の意識と実情、保護者の意識）や諸調査（全国学力学習状況調査・WEBQU）から把握し、各中学校区の課題に応じて焦点化した取組を促す。

２　アンケート作成の方針

（１）学校教育の重点の目標値及び評価と育てたい４つの指標（郷土愛、主体性、多様性の理解、コミュニケーション能力）の関連を図った評価項目とする。

（２）小中一貫教育が目指す取組内容に焦点化する。

（３）小中一貫教育基本計画の部分改訂の趣旨を生かす。

３　作成の方針に基づく整理

（１）学校教育の重点の目標値及び評価と育てたい４つの指標の関連を図る。

（２）小中一貫教育が目指す取組内容への焦点化を行う。

具体的には次のような内容を協議しました。

第２回協議（8/20）
○ねらい（何のために行うアンケートか）を焦点化する。
○学校教育の重点の目標値や育てたい４つの資質に関わる評価の関連を考慮する。
・十日町市学校教育の重点について
①地域愛に関する項目を低学年から設定する（現行は小学校３年生以上）
②「将来の夢をもっている子どもの割合」は夢が漠然としている低・中学年は現行通りとらない。（小学校５・６年生、中学校全学年）
③「特別支援教育に関わる研修会に年１回以上参加した教員の割合」現行の取組評価を継続する。
④「主体的・対話的深い学び」「探究的な学びに関する内容」は、全国学調の項目を参考として新たに項目を起こす。
・４つの資質に関わる評価
① 「主体性」は学習場面の主体性に限定して前項④と関連を図って項目を起こす。
② 多様性の理解は交流を楽しむ態度（現行評価項目２）をもって評価する。
③ コミュニケーション能力はＷｅｂＱＵの関わる力･配慮する力をもって評価する。
○まちづくり指標に関わる評価（ＩＣＴを活用して指導できる教員）
・文部科学省の「教育の情報化の実態等に関する調査」をもって評価する。
○教員に対するアンケートの見直し
・当たり前の行うべき項目（個別の指導計画作成）はアンケートから省く。
・小中一貫教育で意識して取り組んでいることをキーワードで回答してもらう。
集計はAIで頻度を分析する。

４　具体的な検討事項
（１）児童生徒によるアンケート
① 「好きな授業または得意な教科がありますか」（全学年）を削除。
② 「英語を話せるようになるために勉強したいですか」（全学年）を削除。
③ 「あなたは人の役に立っていると感じますか」（小３年生以上）を削除。
④ 「地域行事またはボランティアに参加していますか」（小５年生以上）を削除。
⑤ メディア接触に関する設問３つ（全学年）を削除する。
⑥ 学習場面における主体性（探究的な学びを含む）に関する項目を全国学調№39を参考として「授業では、問題や課題を解決するときに、自分で考えて、自分から取り組んでいますか。」（全学年）を起こす。
（２）　教員によるアンケート（紙面の関係で省略します）
（３）　保護者によるアンケート（紙面の関係で趣旨のみお示しします）
十日町市の小中一貫教育のねらいや取組について説明を加えた上で幼保小中のつながりを意識した活動や成果について保護者のとらえを問うものとする。

教育相談班より

■ １学期の「不登校・いじめ認知」の状況

○不登校の状況（令和８年４～７月）

※（　）内は、昨年度同時期の値

	小学生	中学生	小中　計
不登校児童生徒の割合	**0.61%** （0.21%）	**3.79%** （2.93%）	**1.71%** （1.13%）

不登校児童生徒の割合を昨年度の同時期と比較すると、**小学生、中学生共に微増**となりました。新規の不登校児童生徒の割合については、**R7：0.17%→R8：0.40%**と発生率は微増となりましたが、低い数値を保っています。引き続き、**課題予防的生徒指導**によるきめ細やかな対応・支援をお願いします。

＜課題予防的生徒指導＞　※「生徒指導提要」を踏まえた十日町市の取組

●課題未然防止教育

・SOS を出すことの大切さを気づかせる

→　「SOS の出し方に関する教育」の**年１回実施**

・教職員の相談力向上のための取組　→　教育相談体制の構築



●課題早期発見対応

・教職員の受信力向上と情報共有

→　不登校対策校内委員会（ケース会議）の開催

欠席３日以上の児童生徒の把握と報告

・保健室、相談室との連携　→　相談員、SC、SSW の活用

・保護者との日ごろからの関係づくり　→　子どもとともに１・２・３運動

○いじめ認知の状況（令和８年４～７月）

※（　）内は、昨年度同時期の値

	小学生	中学生	小中　計
いじめ認知件数	**79**（70）	**43**（38）	**122**（108）
1,000 人あたりの認知件数	**43.7**（36.3）	**45.3**（38.3）	**44.3**（37.0）

いじめ認知件数及び割合において、小学生・中学生共に増加となりました。１学期末現在、認知件数は昨年度同時期に比べ**小学生・中学生ともに　およそ 1.1 倍**でした。今後も、積極的な認知とともに、**課題予防的生徒指導**による取組・対応をお願いします。

＜課題予防的生徒指導＞　※「生徒指導提要」を踏まえた十日町市の取組

●課題未然防止教育

・いじめ関係法令に関する教職員研修の実施

・「学校いじめ基本方針」の保護者・地域への周知　→学校ＨＰへの掲載

・ＳＮＳ等ネットトラブルに係るいじめ事案の未然防止

→「新潟県ＳＮＳ教育プログラム」を活用した情報モラル教育の徹底

・「いじめ見逃しゼロ運動」の推進

●課題早期発見対応

・いじめに気付くための組織的な取組

→児童生徒アンケートの定期的な実施

→教育相談の定期的な実施

各校において校内委員会は、機能しているでしょうか。校長のリーダーシップの下、児童生徒について幅広く把握し、必要な支援を組織的に対応するための校内支援体制の充実が求められています。具体的には、①通常の学級の中でできうる方策を十分に検討する、②通級による指導や特別支援学級の必要性を検討していく、という段階的な検討のプロセスが大切です。

ふれあいの丘支援学校のセンター的機能の活用

○学校巡回相談要請訪問

・・・特別支援教育にかかわって、対応に苦慮している児童生徒について、授業参観、対応協議を行います。

○ほっと一息ふれあいグリーンタイム

・・・日々の悩みや困ったことなど、研修会ではなかなか話せないことを教員同士が気軽に語り合う場です。次回は 12 月 24 日（木）に開催予定です。

※他にも特別支援研修講座の開催や校内研修への講師派遣も行っています。詳しくは、ふれあいの丘支援学校ＨＰを参照ください。

学習指導班より

居心地のよい学級づくり　～支え合い・学び合い・高め合う学級

十日町市では、目指す学校教育の姿として「ふるさとに遊ぶ。共に生きる。自ら創る。」を掲げています。そのための取組の一つが、「居心地のよい学級づくり」です。

これは、子どもたちへの WEBQU アンケート（＊）を活用しながら、学校の全ての先生が子ども一人一人の様子や学級の状況について話し合い、「誰もが安心して過ごせる学級」や「学びやすい授業」をつくっていく取組です。この取組を通して、子どもたちの学力を伸ばすことや、不登校になる子どもを減らすことを目指しています。

取組を始めて５年目となり、子どもたちの成長につながる成果が見られる一方で、今後さらに改善していくための課題も明らかになってきました。これまでの成果や課題、今後の当市の方向性について、みなさんにお伝えします。

＊）学校・学級生活への不適応、不登校、いじめ被害の可能性の高い子どもを早期に発見することで、いじめを無くし、児童生徒にとって充実した学校生活を送れる環境を整えるためのものです。

WEBQU アンケートによる「親和型の学級」

WEBQU アンケートを活用することで、先生方は、子どもたちの回答から学級の状況を客観的に把握することができます。

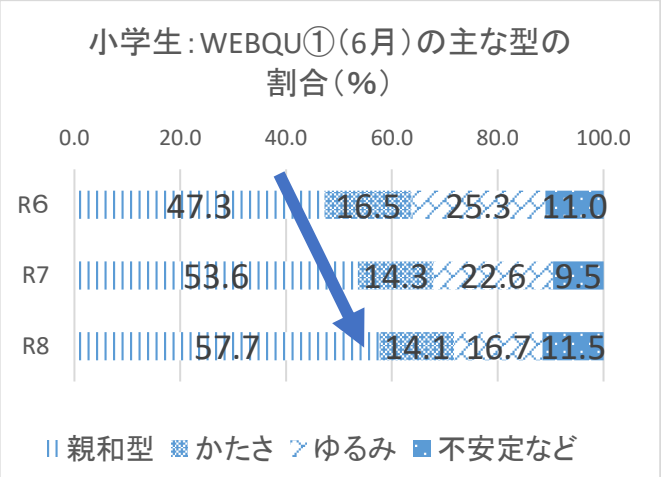
例えば、学級の中にルールがしっかり定着し、子どもたちが安心して過ごしている学級では、子ども同士の関わりや発言が活発で、一人一人が自分の考えを伝えながら、落ち着いて学習に取り組むことができます。この学級のことを「親和型の学級」といいます。

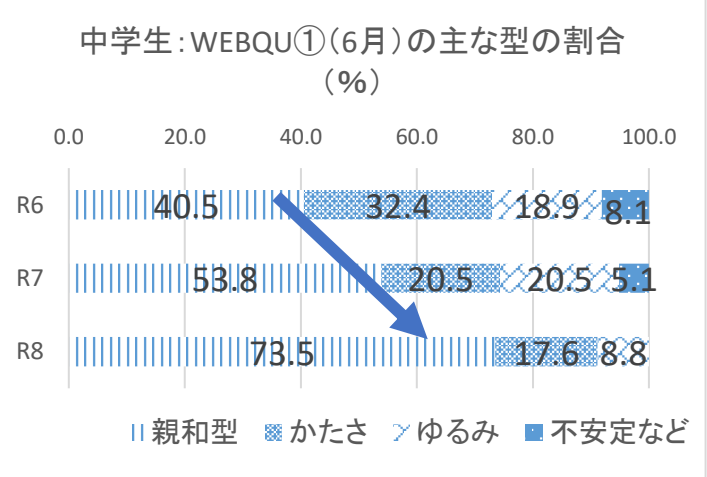
一方で、学級のルールが十分に定着していなかったり、子ども同士の関わりが少なかったりするなど、学級運営が不安定な状態が見られる場合もあります。この学級のことを「不安定型の学級」といいます。このような学級が見られた場合は、即時に、学校全体の先生方が情報を共有し、チームとして学級や子どもたちを支えていきます。

このように、WEBQU アンケートを手がかりに、一人一人が「自分の居場所がある」「安心して話せる」「落ち着いて学べる」と感じられる学級づくりを進めています。

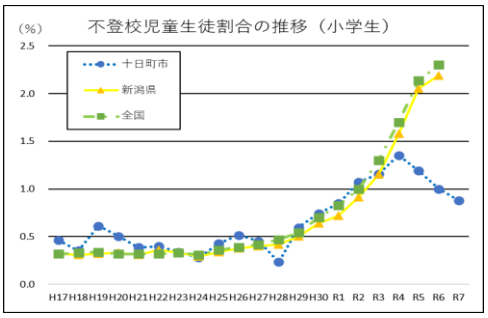
小学校、中学校ともに親和型の割合が年々増えている。小学校での取組の成果が中学校へつながり、結果に表れた。

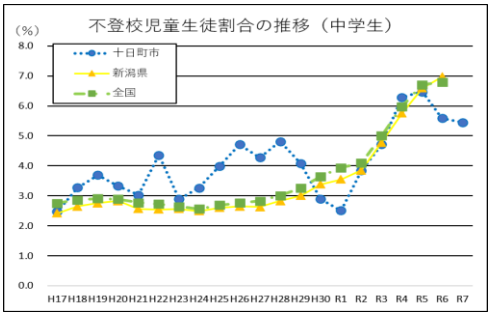
また、不安定型（崩壊型含む）の割合が中学校では０％となり、居心地のよい学級づくりの浸透してきている。





不登校の割合の減少





「居心地のよい学級づくり」の事業は、令和４年度からスタートしました。令和５年度から小学生の不登校の割合が下がり始め、県や全国の割合を大きく下回るようになりました。

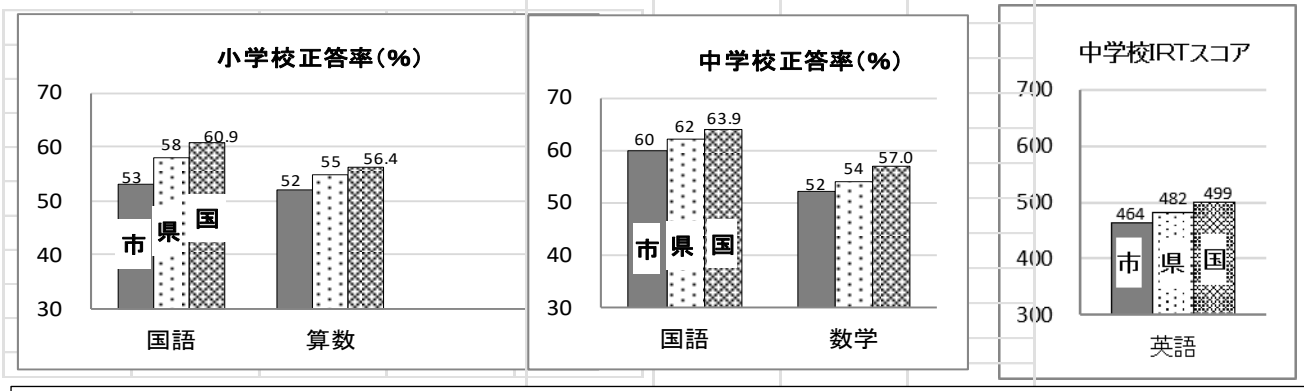
さらに、中学生も令和６年度から下がり始めています。この要因として、校内教育支援センターによるきめ細やかな取組、子どもに寄り添った支援等様々なことが考えられますが、「居心地のよい学級づくり」も大きく影響しています。学級における子どもの居場所の確保が図られています。

全国学力調査の状況

令和８年４月に実施した「全国学力・学習状況調査（対象：小学６年生、中学３年生）」の十日町市の結果をお知らせします。小学校、中学校ともに全国平均を下回っている状況です。

なお、中学校英語は、今年度から情報端末（タブレット）を使った学力調査となりました。タブレット上で回答するもので、国際的な学力調査で採用されています。来年度以降は、この方式が拡大していくことから、タブレットでの学習の充実も求められます。

学力状況（正答率）について（小学校＝国語・算数　中学校＝国語・数学・英語）



今後の当市の方向性

子どもたちの学力について、課題が見えてきました。学力を向上させるためには、子どもたちが学校で友達とかかわりながら安心して学び、「学びたい」という気持ちを育てることが大切です。市教育センターでは、これまで成果が見られている「居心地のよい学級づくり」を、今後も継続して進めていきます。

さらに、子どもたちの「学びたい」という気持ちを高めるため、授業の改善にも取り組みます。授業では、次の３つを大切にします。

① 分かること・できることから始め、全員が授業に参加できること
② 先生や友達の話を聴き、自分の考えを伝え合うこと
③ 学んだことを振り返り、次の学びにつなげること

これらを意識した授業づくりを、全教職員で進めていきます。

また、家庭学習では、子どもたちが「やってみよう」と思えること、学ぶ必要性を感じられること、できるようになった喜びを感じられることを大切にします。デジタルドリルを効果的に活用しながら、学校と家庭がより一層連携し、子どもたちの学力向上を支えていきます。

学校教育課・教育センター事業のお知らせ ～10・11月～

日　時	内 容 ・ 会 場	備　考
10月26日(月) ～ 11月６日(金)	ＷＥＢＱＵ調査（２回目）の実施	WEBQU終了後から、事例検討会を行う。
11月４日(水)	第２回外国語科授業公開研修会 十日町小学校	講師　十日町小学校 高橋　真奈美　教諭 対象　市内教職員
11月５日(木)	新採用・若手事務職員研修 川西庁舎４階　第１研修室	講師　教育センター指導主事他 対象　採用後1～３年の事務職員
11月９日(月)	幼保小連携研修会① まつだい保育園	対象：市立小学校教職員 市立保育園職員 私立幼稚園こども園職員 （市教委指定の校・園）
11月12日(木)	第４回特別支援教育コーディネーター養成講座「動きの気になる子への指導・支援」 【川西庁舎　４階　第１研修室】	講師　山崎　正人（発達支援センター「おひさま」　作業療法士） 対象：特別支援教育コーディネーター 特別支援学級担任　等
11月18日(水)	情報教育担当者会議 オンライン	対象　各校の情報教育担当者
11月25日(水)	幼保小連携研修会② まつだい保育園	対象：市立小学校教職員 市立保育園職員 私立幼稚園こども園職員 （市教委指定の校・園）

【表紙写真の説明】

８月６日(木)、ＰＴＡ中里地区連合会主催による「中里地区子育てフォーラム」が中里なかよし保育園を会場に行われました。

講師は上越教育大学の田中准教授です。講演テーマは「不安やストレスとの向き合い方」。会場には保護者や地域の方にまじって子どもたちの姿も見られました。自分の強みを大切にすること、お子さんをほめて自分で決める力を育てることなど、不安やストレスに向き合う際の参考になることをお話しいただきました。

中里中学校区では、毎年このように保育園、小学校、中学校が連携した研修の機会をもっています。保護者や教職員がつながる幼保小中連携の形として学ぶことが多く、今後もこうした場を大切にしてほしいと思います。

８月 21 日(金)、千手中央コミュニティセンターで第３回幼保小連携研修を行いました。これまでモデル校園の取組を公開してくれた松代小学校の大坪校長とまつだい保育園の髙橋園長、十日町市架け橋プログラムのスタンダードプラン作りに力を発揮してくれた鐙島保育園の藤木園長、指導者として市の幼保小連携にたくさんの示唆をいただいた柏崎市立比角小学校の中山教諭（前上越教育大学附属幼稚園教諭）の４人によるパネルディスカッションを行いました。市内の園・校などから 78 名の参加者があり、パネリストの発表に熱心に耳を傾けるとともに予定時間を超える質問や感想発表がありました。

指導者の中山教諭からは、幼保小相互に子どもを見る目を耕すこと（育ちにつながるのかを見る、心の動きを見る、肯定的に見るなど）や当たり前の自覚と問い直し（「子どもは教えないとできない」は当たり前か？　評価は授業の中だけでよいか？　など）が重要ではないか、といった指導がありました。